



511
2



梅園雜話埤

六 伏見の妓女号竹遊女乃趣と妙

城列伏水の里、流石と都遠く流れて。水の流際く舟有
揚ちて往還の便とけし。行人駱驛とて繁榮の地也。
天正の比々。何某公命と許さして。一郭に妓家と建
う。近里の子弟遠境に旅客。もに玉鞭と鳴して揚柳
とりの。春に梅谷。枕山の花と遊やう。妓と携へて色
香つとぎぬく。殊に深草。山斜の月と見ても。婦と伴はざらん
光と失ふに似たり。故に華美月と盛ん。風流りに新

ありし中、中々世屋をば妓家は、夢に異竹といつる遊女、貌をば
了らば、紫の君に花を戯し、面影、明石の上、乃月、しつひ
顔をも、かゝる思ひ出、ねぞ、そまじく、情方を、よく
人の報も、もさう、さね、よく、かゝり、ゆる、より、鄭中の、第一等
と、して、お、し、う。或、中國の家士、乃、都、一年、く、登、る、が、時、く
通、じて、お、別、り、し、に、今、年、ハ、妻、も、具、して、登、る、は、妻、も、備
後、の、尾、路、と、云、下、の、遊、女、と、て、國、に、て、ハ、風、流、者、の、魁、首
倡、仰、や、と、の、男、乃、價、身、し、る、お、ま、都、方、の、娼、樓、と、ゆ、り、
る、と、て、こ、ま、び、伸、び、て、善、女、の、侍、小、舞、う、し、と、異、竹、殊、に、怪、し、て、何
く、も、さ、る、お、ぬ、折、も、袋、棚、よ、香、の、異、竹、飾、也、と、客、の、ん

と、して、い、ざ、一、如、と、云、ふ。客、多、て、十、如、小、馬、甲、の、お、二、組、三、組、炬
ぬ、言、行、云、連、の、事、に、近、比、都、より、の、い、ゆる。蹴鞠の盤、竹、思、ハ
乞、と、今、一、組、出、し、る、に、彼、客、人、主、婦、ハ、名、の、こ、ま、て、い、ま、こ、も、劇
ざ、ら、ね、ば、こ、ま、い、り、の、面、赤、え、る、格、子、と、い、行、り、ら、く、や、その、心
と、衆、一、さ、ら、び、組、ハ、客、も、作、り、て、も、向、り、し、る。近、比
或、都、人、の、衆、り、て、つ、ら、も、こ、の、比、き、なる、は、人、形、と、い、ふ、た、は、
お、う、く、と、懐、き、宿、ま、る、は、と、客、も、客、も、さ、う、て、一、夜、興、と、失、ふ、
ざ、り、夫、ち、酒、宴、よ、ぬ、て、数、杯、の、人、家、と、大、盃、と、坊、間、と、勤
め、ら、り、に、客、人、主、婦、其、の、事、能、く、さ、り、と、異、竹、魚、道、と、我
は、傾、て、た、ま、興、と、病、し、志、も、酔、ち、色、も、又、さ、お、る、曉、涼、

別遣と送るそ御ぬ其後の胃又常より素しては得の面白り
 事をも云出の体ひしくも珠は情と感やう。蹴鞠の盤
 中一時にこの御事あると恥しとあしりと懐は教へむり志
 し我知れども又玉の尻の尾のらに許多の君らり交
 りゆるが流石も田舎人そら艶愛にえなればと羨める由
 治連にまに恥し一のほども弄玩の道も教くもいざ。あこのえ
 て。おきのきくはらぬ事。又あこの物も後してあきいそ
 の事従多るなり。是のゆゑも事多しとあざむきあつ
 りか。殊都進もあらゆに。これの事知らるお人なり
 ありそあゆめを。固はゆに。いさゝまひもえも志り増

まあ一。まろも大なる杯。ゆゑは。このむい。ひま。い。一
 同よ。わんをの事も。酒も。大は。驚ぬ。我も。今。この。世。の。花。は。時
 見え。ゆ。珠。は。賑。ある。氣。色。も。か。り。一。も。は。女。の。あ。つ。ま。は。れ
 藝。する。ん。と。き。な。り。ど。し。や。杜。世。に。ま。よ。い。も。よ。久。乃。乃。侍
 心。は。け。ひ。し。が。の。深。淵。は。畏。れ。ぬ。又。人。は。嫁。して。家。を。備。へ。ん。ま。は。
 け。の。あ。ひ。の。事。も。捨。つ。の。身。は。ま。ま。な。ま。り。て。その。宴。席。の。興。を
 物。の。職。も。並。に。用。を。と。る。人。は。不。潔。の。あ。つ。ま。は。れ。花。は。も。好。む。人
 ま。は。花。も。う。と。し。じ。り。下。戸。の。人。は。解。つ。ふ。益。と。儲。け。の。上。戸。の
 人。よ。し。して。大。杯。と。捧。ぎ。を。奉。趣。て。あ。つ。ま。は。れ。席。を。君。者。よ
 酒。と。好。む。む。り。なり。あら。今。と。君。の。ん。を。奉。り。た。り。は。内。の。こ。と。四

三三

三三



兄のよに任人通ひゆして。つゞ、雙鯉の情厚く。互に生涯と
りて形うしよ。彼男一夕来りて。云稀。兄の命を急ぐ事
国より。多分ハ彼國より。命を仕官り。身と終るへし。
然して。再命も。期し難く。別乃悲き。姑く。舍く。吾て終
身の約を。事全く。事。汝と計む。の愚かり。事
。さうそ。神天と。御て。誓ふ事。信。非とも。非事。事
。ぶら。あんで。當く。定。宣。討。蒙。て。おの。末。一。一。此
づ。罪。我。在。て。汝。非。少。的。恐。忍。て。討。の。至。る。所
。之。と。ま。ん。ぬ。異。竹。か。も。恨。ず。君。の。出。世。の。事。ハ。故。年
月の。影。と。別。の。悲。し。き。と。競。ぶ。程。恨。の。場。を。ま。ん。ぬ。終。末。と

あゝぬ。涙。と。つ。只。目の。前。は。あ。ら。ま。た。あ。ら。ま。た。あ。ら。ま。た。
ハ。使。く。別。酒。と。ほ。も。何。れ。の。馬。に。鼻。し。け。り。と。別。れ。を。送。り
ぬ。男。に。起。く。と。悦。び。も。家。の。ゆ。と。曹。司。の。存。が。聖。の。期。久
く。起。出。る。と。し。て。わ。や。と。り。て。ま。の。心。の。上。に。命。を。陪
し。ぬ。こ。い。つ。と。奉。家。周。章。一。わ。り。と。ま。ぬ。一。命。の。道
書。り。愚。る。心。を。ま。づ。教。命。と。計。し。人。は。約。す。り
終。身。と。ぬ。し。今。その。誓。と。愛。す。る。身。に。自。害。さ。る。ぬ
曾。て。道。と。辨。へ。ら。の。天。罰。と。誌。し。外。は。異。竹。と。し。書。し
一。織。有。兄。と。妹。の。大。小。た。る。悲。歎。し。を。ま。も。け。一。織。異。竹
一。野。る。と。し。心。を。り。小。僕。を。命。と。既。は。門。と。し。の。野。被

母屋に保見多と失て馳走の。小僕とて悦び。旁に侍ひ
 呂竹の君。昨夜自殺し。まひぬ。枕上には一書あり。袖より出
 じ。ふ。此小僕大に驚き。る。く。と。是も袖中の一封と出し。
 共。古。と。吐。て。言。語。し。つ。ら。良。有。て。く。兄。君。と。思。せ。ま。ん
 と。云。に。花。街。の。文。書。親。族。の。中。へ。い。く。ま。ん。と。此。期。は。至。り。て
 し。少。思。慮。し。し。る。流。石。は。可。笑。物。て。人。は。破。き。又。う。男。の。ハ
 右。の。文。は。多。く。遠。江。呂。竹。の。書。は。六。か。き。さ。ら。ゆ。ま。り。り。多。う
 世。は。何。も。今。は。移。り。が。た。く。控。束。と。も。い。や。憂。世。と。思。ひ。し。う。ゆ。あ。ま
 誓。の。罪。と。も。家。身。は。又。多。く。せん。君。は。東。路。の。瀧。多。う。長。橋
 也。も。出。来。し。新。小。細。く。し。ら。む。ゆ。も。出。討。り。身。に。せ。あ。り。ん。ま

中張の上。う。と。ま。で。讀。も。を。さ。に。異。口。同。声。は。泣。出。し。り。か。有
 する。那。の。心。善。悪。の。作。り。も。か。と。告。り。一。郎。も。その。深。志。と
 感。し。あ。り。迎。き。墨。深。寺。は。棺。と。並。て。埋。ま。一。石。は。名。を。勒
 して。し。き。と。託。生。は。擬。し。し。ら。む。

附 両翁男女對莞の可否と論ず

細川幽齋翁慶長の以。洛東吉田の遙。又。閑居。り。し。く。或。時
 伏水の別館。も。に。り。る。松。永。貞。徳。は。考。く。多。く。歌。連。音。の
 出。物。語。と。何。ん。或。時。の。乱。舞。の。故。實。踏。鞠。乃。秘。説。可。も。承。り
 又。或。時。世。間。の。雜。話。は。頗。と。解。事。も。多。う。し。ふ。も。伏。水。乃

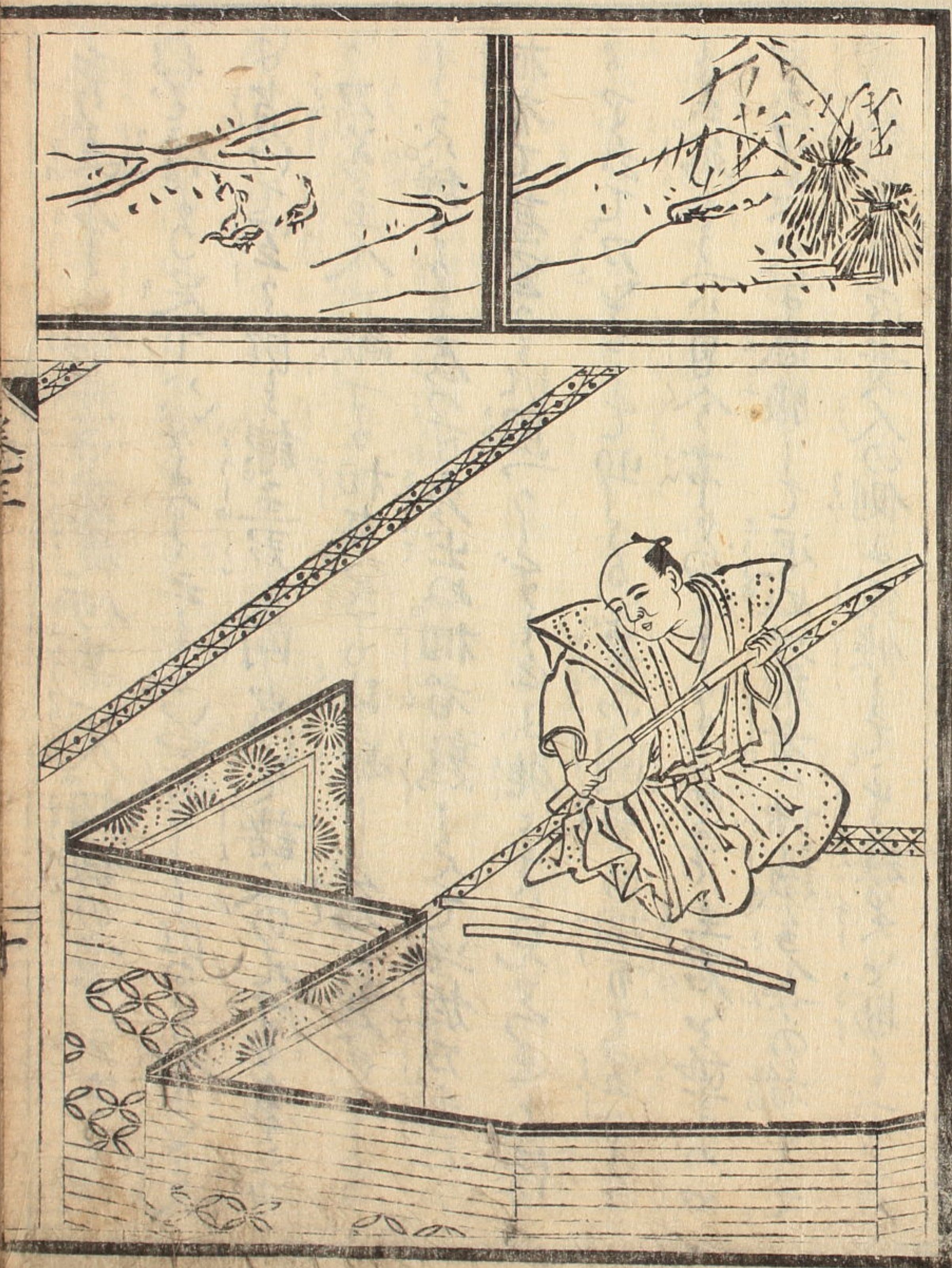
法館て例の文業は物彼まで何う致せば話りかとは作
る。貞徳やいふあり昔樓は号しての妓女終身と約り客乃
うめは自殺せり。その客は男も曰来我家して死し事委
まゆゆら心志くろ事と有。新と出。世の表多き男
女のおぼらふらふ。世に鈍根なる男は愚かな女は彈指し
て笑州しゆ事。何れい使なき事。飛つ。凡真實の情は
死より験とするもの切なり。世に人なれば互に空を通
し。罪人は謙らに死と潔くせし事。仁義の道は背らず。只
惜まき色は溺らる。若し志と君父は行り忠孝天下は著
く。若學術は凝し。名古今は知る。一。謙ら人の己の

色は溺らる。貫し。あつ。多きもの。落情より忠孝の道も文
武の藝も至西ひ需事。まづ。死。い。て。ひ。く。と。そ。人。後
こ。こ。不。実。と。影。を。り。や。死。と。知。る。は。ま。は。し。中。上。は。く。幽。法
る。事。に。い。る。ぬ。情。を。る。事。に。い。男。女。對。死。する。事。既。は。吉。野。拾
遺。は。吉。房。朝。臣。の。後。と。強。し。近。世。も。同。く。事。を。多。く。は。父。母
乃。戒。は。違。て。こ。非。打。改。新。き。と。悔。る。互。志。の。付。け。り。り。起。る。事
う。て。情。を。り。甚。ま。き。是。義。を。人。一。向。の。瞻。漢。ま。て。無。慚。の。人。と。云
了。又。是。下。の。く。偏。は。情。ひ。も。一。隻。眼。の。見。解。し。て。全。く。道。を。り
と。云。報。し。能。能。視。跛。能。履。し。是。と。云。凡。對。死。の。者。は。志。狗
死。乃。者。ゆ。り。大。道。と。曉。く。て。真。は。仁。義。の。眼。と。用。く。何。う。か。

不正の死と嫌もせん。故に天下に大道と示しおいて殉死と禁ず。況んや男女の對死とや。然るもや天道と明らむして只私情の向ふみの切なるもの。天理と私欲と昏る。仁義と名利と害たり。はる事。害もして實に美し。正と欲して正も善き。信と私路も善き事。憐れむ。物にも涙もよする者の殉死と朝日傾城と馳て死と會する人の對死と譏之。五十歩と以百歩と笑ふ。非して百歩より五十歩と笑ふ。一尾生橋下は溺死も。今世の俗情のくはあつとてたててくはは法美も及ばず。

七 醫官某叙相并七ツ目の支家と難す

いつの頃かの相叙の法行な。諸侯大夫もその相者と得て事叙の吉凶と相やあひ。列士庶人も叙と縁と需て略驗あり。のののの武家の要道と日毎に門は群とあつと及つ。一日彼相叙者と或諸侯の館へ招請方階の君子五人及び。懇顧の諸士數輩。今集有て彼相者。各刀叙と相やあひ。或は長壽或は福祿。或は演説する事水の原もあつと。或は強秘藏と切の各叙者。又中には凶悪の相と課して。愛と愛とや。伺候の面へ追習は者と好時節よ。各物出數百の刀叙と相



そり。夫平は彼侯の慮徒何某一人相叙の事云出づりけ
れど傍より足下はいふるを云へり。此等いふるを答ふと友
は背けて宜くばと練。主君も聞かして。諸人のいふる事には
刀を主人に敵する相方なきも中叙し。急きんせんと有
し。六辞するも及り寸尺出ぬ。相者熟とんて。以短刀文死の
相方て甚宜くは用づくすと云ふ。能く見ると思と傍
より云て。刀をもとて出ると。是は闘争の相方て宜く寸
と云。然るうへは自今事あることあり。ある主君と筆の口
口云けば大は感服して退ぬ。以相者ハ指織多兵の者として
相叙の事。此貴人の側は伺候して。以談笑と助くづき力

り。若者好。又きめて列国の諸侯未降の日も。以て候ざり。此の
慮徒が前口短刀と筆一と見ふ。足下の事。此は性口とら
悪相の短刀うへびやと云。いふるを答ふに。夫は用ひあつて。此身は
為小置り。いふら。則不忠不孝とす。若者の慎み。形此は邪也と云
ふ。いふ。此外の人。も情の強き少年。か過と改よ。各いふ。云ハ。相者
謹て申す。相者ハ。少叙し。主君の嚴命。少も背き。非。是も
此省の後。早速指習。此の処。脚思。意首て。指習。いふ。思ひ。いふ。い
乃ハ。抑は。刀ハ。父祖。二代。修身の。腰刀。とて。父通世。乃日。小。子。殺して。
我。う。ん。は。と。子。カ。と。常。を。い。ふ。と。連。て。は。も。サ。カ。也。又。短。刀。ハ。小。子
と。傳。育。し。老。人。の。託。命。なり。と。終。焉。は。除。て。は。自。讓。し。一。腰

かまひ。是もその人ばかり。一々。若し。ゆる。あ。い。ふ。刀。不。祥。の。お
有る。疑。あ。づ。き。に。非。は。り。と。是。亦。お。お。び。ら。る。非。は。り。と。父。祖。の。道。令。も。肯
難。け。し。た。ん。ア。も。も。第。一。と。て。も。大。食。大。酒。も。も。ん。と。あ。の。何。ハ。も。も。被
天。死。の。相。の。お。す。あ。い。と。心。と。お。お。め。或。ハ。房。又。入。武。ハ。危。は。隠。ま。バ。又。の。後
刀。の。凶。相。も。も。自。ら。戒。込。し。闘。争。の。相。乃。刀。も。同。く。人。と。争。お
心。出。さ。る。す。ハ。彼。要。相。も。心。と。平。人。は。謙。遜。で。争。と。情。じ。う。ハ
い。お。刀。の。お。自。ら。身。乃。驚。と。威。父。師。の。恩。も。弥。厚。く。し。て。ア。も。思。ひ
あ。い。ん。す。く。の。法。神。と。昔。く。に。似。て。て。ん。で。も。ア。も。を。第。一。ゆ。め。
低。致。平。身。し。て。述。る。は。満。座。を。と。向。主。君。も。深。く。感。し。む。し。ぬ。
相。者。ハ。少。事。さ。あ。る。心。地。し。て。法。も。權。も。ま。り。か。つ。つ。あ。り。既。去。客

も。駒。車。と。遠。く。て。後。脱。迫。の。侍。臣。も。修。君。邊。は。伺。公。し。今。日。の
餐。應。乃。風。流。と。諸。客。も。厚。く。褒。感。を。事。う。せ。終。し。借。彼
慮。後。の。親。族。に。長。年。う。終。す。ら。何。某。年。弱。ま。て。御。前。と。憚
り。に。先。乃。腰。刀。の。首。懸。と。ア。せ。事。當。理。ハ。似。て。か。つ。て。も。さ。る。云
と。思。は。る。事。全。く。思。慮。の。後。と。ん。何。の。沖。音。怒。と。似。ま。り。く。ヤ
と。ん。主。君。聞。け。り。全。く。あ。い。の。渠。り。り。相。叙。と。用。ぶ。ら。に。非。言。語
穩。り。て。慎。で。陳。謝。す。何。う。不。敬。と。云。ふ。年。若。か。う。天。晴。れ。も
あ。い。心。底。祝。着。や。り。と。の。褒。辞。は。各。感。謝。し。と。も。さ。る。若。ハ。松。文。再
拜。し。て。退。ぬ。沖。音。は。候。り。老。医。何。某。講。出。て。誠。に。何。某。う。辞。道
は。當。り。ゆ。く。ゆ。く。君。の。感。給。し。玉。了。事。亦。目。出。さ。る。是。ゆ。り。に

人々相一馬と相する事各家くの秘傳としてせしめ極むれ外々
竊ふべき事秘傳と相する事奮く六開も及びるも傳來りける事
ふ有づくは張良の韓信は叙と詰し時大元帥の相ある叙と云一
と云夫は求むる時とてその漢土は姑く舍我國とて三種の神
器の内は寶叙は定て至極の吉相なりきと行して安徳天皇は夫と
佩る海は波しなくもくえ不審なり愚は案するも叙徳は是人徳の
標事として人徳全くもく叙徳も有り雅きと身作り佛家よ
加持祈禱する事誓言は長壽と祈るは其人至て不養生な
らむ何ぞ驗有べき身の養とてしてせしめ祈るとんを驗
あり故よ加持の字と書と見えは只道德と傳めんと志り

ついで近世生む年より七の目には支象と考ふる所は立身する
て我人是と座右の玩物よ求む甚あは牛馬よ衣冠と着せしめ
く。壁よ顔する者何人の借何れの書よ在と云事も未開の
是し愚は梅子に十二支と十二方よ配して七つは正對の子は午
に卯卯乃酉は對するがふ。然るに正位と失はるは禮事として
礼よまよは必方と平して君よ疑はしめんと云わく其瞻視と考
するは意なりん。是しと支象の正對と云ふは己の行は正道と失
ひてんは何の益有べき事か。其は畜身は人服と画ける事
官服と穢し人面歎心と標するは似たり。其上畿府の地よてハ
生年の支象より右の統と云ふは。是し水去又依て異

あるも其學をまかす。愚俗の人、任他貴介高公及び學道の荒
穢も、爾人の心を普乃行に有るべき事也。家居のまよ居
風乃繪をたてて、住人の心は押さく、徒然草も又、
りて、
傍軍のより、下憎めも有る。主君乃黙致
すまに、心をも、かゝるる也。

ハ 奥州白河山中地仙墳の來由

貞享年中、奥州白河の山里、何某の農民者、渠々耕地の
行圃の所、或秋大雨乃後、その畝中半崩れて、石出樹倒
ぬ。故に一郷の人夫と雇ひ、せと石を運び、田畠を損ざら
し。崩れ、一園乃發立する。又重むて、崩り、せと切卸
し、つゞす處、一園の下、一つの橋穴を、掘出せり。つゞす處、
蛇蟻蟻の住る、とく、恐る可、近竹、さう、が、
内別性、つゞす、れ、進んで、奥と竊、つゞす、園、つゞす、
難、

柴灯と照して入行きには三十歩斗まはる一室は小堂の如
うもの者。いけかぎの事先けり切崩してよままた
数百の夫カマて十歩斗の所しむ。神あり穴の口も
ちよめて肉も良ゆ。蛇蛇の類もくまぬ。人々も
岩は各柴灯お振て入りし。るは遠り一小堂あり
あは一双の木履と重西扇の扉と因て寂くありあぬの
不審風情と。人々集り評論するも何れも夫とやん
説か。兎角か。奇異なる事。光縣令一訴よと人々
をらしめ。かきと考らにけ所の縣令何某の書と讀文と愛
頗る好事のまのびむ。是一奇事とと收ひ。其日既に

黄昏よ及びぬ。事ハ聖人自ら行て入ると云ふ。其
彼洞口は成人と對てきし。の咽と又人々集會し。兎
角より縣令來りて案内者と先まて穴中へ入。是次
又るに。松るに。霧遠り。思ふは是ハ古人の遺骸と。蛇
籠るへ。去る肉と。んずんハ有る。はと。仕年の夫方
小知す。各々急息と。戸と開入ると。今ま。と。押
留め昔古廟と同一の肉より石と飛し。矢と發する例と
ま。且。整鬪の氣も。く人々。慎て息と。因。は。隻扉
と。開。と。柴灯と。今。窺へ。濃。は。教諭し。徐。は。西扇
は。美。と。肉。は。一。堆。の。石。床。有。て。六。旬。斗。の。老。翁。身。は。

黒き衣と著。頭の髮斑白するが四方は垂坐と組むと拵き。
 冥然として居ると固密裏と云い堂の内を定んたも見
 え分は。是は木像の石佛の目と睨むの如し。彼老翁眼と明
 うた開き。乱まると髪と長き爪を掻き分け。頭と揺るが
 近付し血氣の力夫二人大に思戦き。又妖怪と云ふの如き
 切らも有。傍に倒して氣と絶するも有。自ら白身の毛ももろ
 方他もろ。令急に彼床前より踏き。今計らるるは龜扇と
 て異人よ謁しむ。柝誰人か。そ何の志願よ。入定し玉ひぬる
 と向は。彼翁一息と吹て良久と云ぬ。元暦文治より幾千
 の星霜と経ら。令吾云既は五百年は連ふ。又問今に皇統連

綿やる白。善云也。又問何氏の人武将と云。答云。かくのと。又問
 夫は徳公義経の末孫と云。答云。是也。其時老翁嗟嘆して
 云。妖道する事と弁して信じ。今五百年と経て看破する
 事とゆ。愚中と愚と云。一人面と對する事と恥とて低
 頭して涙を拂ふ。令重て回強て老翁の姓名と問ふ。老翁答云
 我は元暦の昔源廷尉と頼む。ヤヤ。常陸坊海尊と抑昔少
 る。時。園城寺に在て密教と學入り。内典の微妙と傳ふ
 め。守。外典の學と好む。久し道術と耳。並法相法と混
 學ひ。其方の面白く心は迷はせり。唯ひる。其の如し。
 治承四年の秋に此。廷尉海尊木曾追討のあ上落り

にそつば見糸一奉り。面と詳しけり。王庭は光有て西身一
至尊の相有。三けり。此の貴相あり人ふ。天下と終る人
の心入る。此の心より。下にかり。軍の心見
ゆらに出入親。常り。卷舒法有。常人。此の心見
お徳き。一谷檀浦の舉止誠。神妙乃至。平。雲で。眼近
する。弥容貌と窺ひ且筆。も。身一夜。災逢
此の心見。子孫終。國王。人の相全。疑。斯の
如く。人。値。偶。り。幸。運。無。二の忠信。盡。一。仕。一。小。
景時。諛言。腰。裁。多。追。疾。昌。俊。討。手。登。セ
ら。彼。災。難。乃。相。先。知。心。ハ。驚。唯。幾。度

も憂く。憂。り。と。神。も。奉。り。奥。列。一。至。三。心。也。心。也
を。慰。め。り。文。治。五。年。高。館。よ。り。生。害。有。は。君。失。以
奉。り。其。以。誰。渠。誘。ひ。て。物。指。し。出。路。の。事。そ。は。途。中
ど。ん。ど。ん。と。経。て。聞。驚。き。追。腹。切。ん。事。災。ぬ。成。ハ
固。出。家。の。身。と。て。兵。家。よ。り。忍。辱。の。衣。と。甲。冑。よ。り。信。爵
も。一。と。甚。慚。愧。し。尤。狗。死。と。思。ひ。設。く。去。り。延。尉。君。ハ
吠。統。の。相。お。子。孫。王。者。と。生。せん。の。進。全。疑。る。ま。と。せん
若。は。相。お。あ。ん。思。年。に。修。学。も。水。の。池。歴。代。先。哲。の。辞
も。虚。妄。と。ん。殊。よ。業。深。き。如。將。か。是。ハ。生。害。の。射。披。あ
有。て。何。地。つ。盤。一。玉。も。討。び。死。ハ。一。旦。と。易。



と腹黒きとてふると忍びて彼を殺し惜ぬ命長く安ら
しこは忍びたるも彼我黨を尋る令もるめけは幸救年
夢び一術がごとく天仙の法にまで至るは雲とかけ風は御する
こはあつひと地仙と成るは金を得て鐘乳と喰ひ石芝と
嘗て長生の法とあり終に窟中に入地脈と喰ひ金積
と及て不老の身と成り去るも今五百年まで延尉君の
子孫王と事なり我ふすれあは無益の學術は身と旁
り申ん。固愚のむり面の行將水と成れと結平て又低頭
せし。縣令逐一は剛平り良えてや先以高名天下の口碑
に普き常陸坊老翁は觀面謁しあること希代の珍事千

歳の奇遇と云へ。今宣ふ所も我人か思ふ合せり
は義経君高館の自害は尤偽計にて蝦夷は憂ひを憂
法師も衣川を戦死と偽りもに夷国をとり兵と記
て夷人と切腹け後ハ蝦夷の大王と成りし御あり義経君と
称して續て勇徳と以て國と從(壽)と以て終りわとぞ。やほは孫
遊(連綿)せらる。中は豪傑出て韃靼を責入て彼國と切
從(韃靼)王と成りし其後明の代は淫風苛政と憂ひ沙
漠と渡り中華を責入終に永樂の皇帝と成りて一天
下は清康熙皇帝と成りし。全く清君義経の末孫と
日本清和天皇の皇裔と云ふ國號とてその一字とありて

清く号する。近年舶来の唐僧の物語は美りぬれぬ。誠
 しくぬ事も信ぜざりし。今老翁の御物語とるる。つ
 のやんたは竹の結りて海尊をて。拍掌し是是こ
 昔今五百年の疑破して心青天の如く。云々見る。自は
 泡乃流るるに志く。成て一潭乃水た。残るる奇
 異する。有づた非は。其窟を埋りて上は一基の石碑
 と建ぬ。此事と誌し。金玉一。村民もすり。彼康熙
 乃一條全く真偽の明りぬ。ずる氣を録す。一悍
 者として縣令肯ひ竹。唯地仙老翁之墳との刻
 ありしや

九 三光院為再議議乃州府と訪玉也

入道前内府室澄公。春服既成のはひ。花鳥の色音の
 しく思ひて。心まわぬ。近習乃居三人四人具せん。西の郊外
 よ出ぬ。大決廣決乃池と臨む。名をの。既に旧蹟も尋ぬ。不
 しく。づ更乃緒より。松のいづとひて。一見
 せむ。かく多りぬ。う。頃用。たまより。海船の同
 及び。陽者。事なり。出せ。ゆ。一見。顔の面白く
 殊。世を編む。氣象の忘る。け。い。ぎ。立。寄。り。回。ハ
 くと。嵐。亀。尾。の。花。は。宵。り。て。の。山。道。と。尋。り。つ。や。

事又悟しきの事しきの神道日本の大道也上一人下
兆民をそ知ん事さう有るのえん押て支那天皇はなほ
惜ひ事方ん也。案に神道と松丁りののと権輿恠う
先我国と神国と云事。日本紀より文徳實録より五部
の書に神道と云事。此より一二を以て見ても神国の道
よのあはれしと。只大道乃神とて測るべきの秘也。然れど今
の神道と云事ハ全く凡常の建立の思。老松の号端より
これ見解狭少りて至現の小道に比するものなり。此
佛佛莊老の道は遠く吾國より信ずるものなり。我神

ハ他の國ハさうさ日域より他より成り事。今も揚墨
兼て作者も心持り。面授口授と傳を強し。由るに
是明白の論として異論がたはびつて。吾國はせう
國を譏るは似ては心有りをも皆覆て頭さぬ。夫
して神學者流の強慾者も謝物の教を極行の信ハ白銀
何故何の傳ハ黄金幾回も。價を求めて涉るものなり。
うら恨りも道の本と成り。秘を秘傳と定め。故
夫も教する。何事をも秘傳と云事。古も軍旅の法及



刀鎗の術を以て其の勝負を争ふは人の道に非ざる。是既六韜の六經の者也。王道の霸道は増以兵や中二就其は秘法有り。又信し難し。医ハ仁術にして人の危難を救ふ薬を以て一人も多くあらしめては薬を天下に病を以て人を殺せしめざる事こそあり。ゆりまひ。家法家傳と秘するハ鬻ぐりのとやかくして。我一家の價と納ん事とある格情を何ぞ仁者の心と論ぶべき。是又波猿まもるは併公のその意を以て。教誨と以てとやかくし。公點歌より。翁が如的論と云ふ。是も經學の如くして。国学は疎し。故に平現の末術として。神學乃本道と竊て似

し。且醫家の秘藥。真言の密法。其事。我も疑ふ事な非して曾てさる老翁の言。事有。人の云秘薬と云人の所。入胎入及ひ胞衣と云る薬ハ櫻はゆり何にこそある人々害する。秘薬。人冲黄人冲白。此條微惡の物と加ふる薬ハ病人を治す。思ハいかし心あり。此の配劑と秘薬とを以て誤るは劑と誤す。今春著黄耳の薬と秘するは法は格情。つらうして名利と貪むるなり。喪命隨胎の薬と云。愚惡の人は傳ふまじ世間は大害有。これらと秘法と云て又隠す。真言家ハ有驗の法と修法。法は依て。善より利有。かゝる害の者あり。曾て朝敵佛敵を以て。調伏の法也。法を以て愚惡は人に傳ふ。的ハ己は害者人と調伏

しよ利あり事と、他の害と厭う事行ふ事、然る師の家
りの能門人の篤實と照して授けざる事、是れ秘なり
として道理と工一。刀鎗の術も、奥意は必勝の位なり。是又
鹿洞の人物は、彼で世に害者一。軍隊の法は、む弱くせしむ
ら。相神祕と云ふ事、吾国の天道也。夫といふ事、ある南土は徳と以
徳と讓と極して、天下の人皆帝王と感乃国なり。日本は神代人
皇血肉と傳て、君ハ萬世の君。臣ハ未代ハ臣也。然れん天子の事
ハ天子切の神祕なり。他人の窺ふ事、非、摺園の事ハ
五家の神祕。三公の事ハ、清花槐家切乃神祕なり。是又他
の窺ふ事、非、征夷將軍ハ、清和原氏家傳の神祕なり。て

他姓の窺ふ事、非、と、鎌倉將軍衰座の頃、北条家既
權とて補任と行ひ、つうかく人心とて權勢なり、誰
人ハ天下と掌握する事と覺て、夫より而下、列国の群雄
競ひ、犯て天下と争ふ、及つて、敵織田豊臣のあきも、終る青
幕と捲げ、つらつらと志ざり、つうかくに控ふる國風なり、巴
ヶ社、その社乃神祕、け宮ハ、此宮の神祕なり。他ハ、彼は、
他と窺ふぬと道なり。夫ハ、教て百工百職も、むくら家風とある
として、神祕と云ふ事、恒の産あり、恒乃心あるの教なり。上下
咸く、此業と有り、争ひ、天下萬事、世安穩泰平の道なり。
然れども、翁ハ、け窺ふ未知なり。世俗あり、人ハ、雲上月卿の

家々各其職業とこそ秘傳玉ぎよ。終と傳へて。是ハ教道の家
にハ鞠道の家と技藝の上と珍重するも衰世のちねも
識者の潮と知ぶるも仕と宣ふも猶大ニ感服し何ッ
包まん今とハ竟舜の道行もさして吾國の渠よ及ぶらん
の恨めしむに。今圖ゴる山持一珠履と奪わしも貌と深
丁のさうだ。始て君子國の正道と圖事とほて可謂天の
ハ重雲と科戸の風乃吹拂ひて蒼天と流く心池しゆら守
いしハ公も歡喜の心顔をもとらん。後ハ愛ハありし赤鳥早
西山よ波しぬ更ハ又さうのと此とさきとぞ出ひの家

續新齋夜語卷之五

十一 只法親王寺門の道災と知事

元禄の頃より天台座主は任しおひ。一品何し法親王
ハ智徳こた高くいまうかやとる。東の比叡山住まを
むひ。一日淺草寺の大悲閣は詣でさせ給ふとて下谷
廣徳禪寺の門前と過る。御輿の内を。此寺の大
門と看過るをむひ。供奉の人と片は寺ハ何し寺は
と問ひもむを志し。終ぬ。後徳山の後縁髪元は信有ハ
路傍に見たり。廣徳ち大門に建る由他は異なる容

有り如何なる故の事なるべし。吾は出入する工ともに尋ま
宣ふ。彼是問う一人の老番道にや。誠
は佛なる事の約なる。往時け門建り工の成就乃
後つぐるる。此門の高さ門の幅は應して一尺低
し。見ゆ。是全く垂繩の神考(定じ)るる。甚の
鹿忽として今更んす。かひも。住山の諸神子と誓
大小の檀越及び同職の工匠等も。誰一人報ずるもの
あ。只。簷牙の高く。吟と称し。我は。こめて。月日
あ。或日世門前と。又も。願は。一尺低し。と。掛
戸そ。に。跡より。報る。是も。番道と。二人連立

事。此大門の。功の。工の。は。業と。る。る
に。門の。大。た。鷹。と。高。一。尺。と。謀。る。は。は。子。と。語。る。彼。工。人
肝。に。於。て。借。人。の。目。も。又。も。あ。る。事。も。行。肌。と。犯。
甚。慚。愧。と。言。ふ。宿。め。を。後。勝。と。言。ふ。快。く。は。終。る。病。と
成。死。え。と。も。に。際。で。あ。る。事。も。子。に。語。て。死。後。を。伏
世。事。と。愁。ふ。と。息。絶。ゆる。と。言。ふ。夫。も。吾。倚。中。を。謀
の。規。範。と。し。て。語。る。傳。あり。近。世。の。過。と。思。ひ。て。何。事
珍。し。き。他。事。或。は。堂。塔。或。は。樓。閣。皆。他。而。在。在。未。だ。と。操
竹。々。と。治。す。と。具。よ。く。と。啓。す。と。法。親。王。同。一。旨。た。く
仕。有。つ。是。昔。も。所。有。て。尋。つ。る。よ。ま。は。異。し。と。志。し。し。一

奇跡と聞ける事の不思議也。故物何より速に古一大門
裏造りし所の朱雀乃南に羅城門と建れしと。柏原の
帝の膏覽有ては門一尺高一必風より破損有下
柱一尺と切つたより勅諭有てゆくと玉ひぬ造るに遷都迄
成て又御覽して勅諭あり。朕仰めりて見て一尺切
と云て有り。一尺守切りたり。今守切り高く見ゆると作
るに工伏轉び震戦きてや申す。其門の長ハ本乃門にやふ
立合はゆあり。一尺切ると勅諭有ると作のまに切りし所
低く成遠く見ゆると高く見ゆると作のまに切りし所
の平一尺と見苦く思ひて守切り切てゆあり。今五寸

と作ありハ初御覽し遠くハ倍なり。五寸強くと切ゆると。誰
事より増し御目の程と恐感なきやぬ。帝より見ても今
切ると遷都乃日近く成てえあり。さば通る者も但
風よりゆりて吹倒るんと勅諭有る。工いづく強く作り
ゆり五寸切りて是は危き事ゆりてと中けり。柏都移り
け後末の世よりして。と夜ぐり吹倒るるを。其門
間乃高低尺寸と争ふと是の通り。今東武ハ南に海と文
て北に山嶽遠く。東西も移平原の国にて風行高くと
ぶり地理し。且年より増る繁榮寸土の空場も。荒ると
らゆ屋とびば。さるく失火ある所の敷くくして大なる

及ぶも高き之。あるに彼寺門高さ一尺と減して建てる
 事。風の患と避け火乃災と避く。便の道。去地は應として
 大幸に差圖と受く。ゆるま。い。ゆるる。宏智の好。ふん。と。思ひ
 した。都も。信立の是と。愁て死せること。只眼前に好否は。泥
 て大利の得失と。知る。り。也。恨。く。く。吾来る事。と。は。集
 ち。事。先。して。その。愁死と。助。け。ざる。事。と。は。終
 者。の。果。して。此。寺。門。今。よ。至。り。て。風。火。の。災。乃。る。ま。り。各
 譽。あり。也。

土 一農夫の信義公廳と感ぜしむ

武藏野の唐き沖島乃風は偃て草葉物多は終る形瑞
 の。あ。つ。思。迫。き。ひ。ち。り。の。泉。屋。何。が。と。酒。肆。者。棟。高。く
 住。り。家。老。店。を。奴。婢。大。勢。持。持。一。貨。財。庫。中。に。充。ぬ。
 一。子。得。太。郎。ハ。寛。柔。ハ。長。ろ。そ。糶。糶。の。術。ハ。疎。く。刺。迫。年
 花。街。ハ。入。て。多。く。金。銀。と。費。し。り。父。母。之。ハ。怒。り。て
 家。内。に。追。出。さん。と。せ。し。親。属。も。漸。々。省。免。去。ま。り。一旦
 君。氣。の。過。つ。ま。バ。お。し。ま。さ。も。非。以。来。と。社。と。得。太。郎。下。教
 訓。一。遠。く。に。婦。女。迎。て。ま。り。世。上。一。般。の。経。済。ハ。父。母。一
 子。の。事。と。云。浮。き。罷。り。し。の。怒。り。春。水。と。激。く。兎。角。は。迎。婦
 け。り。と。急。ぎ。得。太。郎。も。過。ぎ。改。め。経。紀。ハ。心。と。ゆ。ね。あ。り。く



河朝画

卷五

四

實身を見し。赤繩を以て三年ぶりの獨
枕の枝然し。又或夕紅塵と云ふに。享席の修むる紅園の
艶々たる。腸よし。つら。冷房再び炎と成。或時ハ酒と携
て龍山の花小進。或時ハ舟と遊。く墨水の月。戲に放蕩
先年。報さ。亡失。黄金忽二百斤。乃至。秘匱の一隅
と云く。や。父母再び怒と奪。こ。び。親屬と。た。肯。いて
終。久離。一家と。追逐。ぬ。得。を。希。せん。て。あ。く。元來。一鵝
紅。油。中。に。在。る。け。思。ふ。又。落。く。然。し。て。路。致。よ。い。窮。情。乃
内。小。一。策。と。思。ひ。出。梵。論。寺。に。走。り。入。て。身。の。上。と。詔。り。佗。鉢
と。事。と。辨。し。と。寺。勢。聞。届。け。兼。て。戲。席。と。玩。し。と。幸。よ

笠下。は。是。と。傳。て。日。毎。は。藩。中。と。廻。り。ぬ。渠。舟。も。折。く。乃
旋。ち。て。の。ち。放。蕩。志。の。回。郷。は。長。居。す。の。阿。又。酒。と。云。ふ
の。の。ち。を。遠。境。修。行。す。と。先。達。と。副。て。京。師。に。送。り。ぬ
旅。中。と。も。唯。一。簣。お。着。中。よ。ゆる。一。握。の。雜。穀。と。り。て
お。勃。し。り。入。喰。う。人。客。と。需。は。心。を。旅。も。も。馴。ら
右。卿。の。と。慕。り。く。先。非。と。悔。る。事。切。る。是。も。落。花。枝。を
還。る。に。流。水。源。に。回。り。ぬ。身。の。上。衣。乃。落。の。零。落。と。漸
して。京。都。に。到。る。の。先。達。の。計。ひ。ま。て。幽。々。の。隱。居。と。云
與。へ。ら。是。先。達。ハ。浪。華。の。地。又。阿。刺。者。と。別。れ。出。ぬ。得。大。帝。を
者。り。出。活。中。と。佗。鉢。と。市。中。縦。横。よ。廻。り。し。と。云。ふ。友。

けりて多し町の名を綾や錦とちりつきたる紫陌の地繼緯の
 袖の恥し。何とぞん肩身窄けそ。竹の音はた快くはな
 遠く乃地を心安く中く施物もあつた。昨日に園傍まわ
 雲の辺と地を。さう太素の跡は家もさかしく修り
 ゆるりして唐沢のたれ農家の門も吹く。と親戚の
 内より首飾りの男出て修行者もあつた。今日も志あり
 進み下りののり。さうとさう。許す。及び内へ
 ぬ。湖史婦自炊のたれ。茶もあつた。天蓋もあつた。つら
 ぎもあつた。たれ。さうとさう。蓋もあつた。お折敷も
 飯盛て下り。圍炉裏もあつた。一塊の老母莫怒無飯

釘笑指灰裏芋栗香く作事する。かやと候く。あつた。出
 絶り。あつた。一曲の向も。行も。あつた。あつた。
 日も。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 庭傍の何国の人。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 屋何某屋の。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 即ち。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 命の。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 相も。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 子。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 家業と。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

てう許は油をいぐ。親の徳を失ふよりあつても、國年を建ひ。
今よ逃る煙とまはれども、大人のはたき、末のまも言れども
此の圖らるるは、形とてんをいふ。何れも大人乃容貌子
おどろかす夫とけりともいふ。いふ。は、白髪のつらさ、か
つひも事のおくも、おぬ世の法、縁をまづく、戒家
やまらひ、いひ、おどろかす。形、おどろかす。困窮のなる、
ゆるる、たき、いひ、おどろかす。けりともいふ。いふ。は、
陽意のき、辯、甚感、いひ、おどろかす。免、も、角、も、
解、て、いひ、に、いひ、と、修行、いひ、おどろかす。望、の、施、物、と、
君、必、性、の、非、と、改、て、改、つ、いひ、おどろかす。父母、乃、勸、氣、と、
純、て、家、業、と、純、

後、つぎ、は、志、は、る、ま、と、あ、り、得、太、帝、夫、を、夙、夜、の、勤、い
る、ま、も、再、應、命、よ、肯、一、不、孝、と、い、何、一、の、志、と、改、め、る、と、い、
證、據、の、け、い、は、論、ま、又、の、接、接、ま、も、詮、か、へ、い、も、あ、り、
かく、ま、て、辛、勞、せ、る、身、よ、不、孝、の、罪、と、思、ひ、め、ら、う、の、事、は、以、来、柳
花、と、い、ん、眼、有、と、涙、と、流、す。主、う、云、君、を、い、い、お、つ、い、
よ、云、ん、若、彼、費、失、ち、二、百、片、の、金、子、と、舟、と、故、は、い、ゆ、え、先
非、と、悔、て、沈、玉、り。雙、親、の、御、怒、解、ぶ、り、事、ま、さ、う、い、
い、ね、ま、者、ハ、勸、氣、も、ゆ、ら、ぬ、い、ま、い、ま、い、天、ら、り、降、る、地、ら、り、
涌、る、其、野、年、と、待、て、一、笑、す、い、ま、い、色、と、正、し、
若、誠、よ、の、教、乃、回、金、り、て、歸、郷、の、本、懐、成、就、と、い、
い、

我は一筆のさびづりあつた云得太師のこの我と覺じ
る心の一の事やうると思ひ篤く恩と謝一の事ども一顧の
金銀より日と重ひて入る門の何行計あるか云ふ心裏よ
ハ肯かりしに日と経て得太師と振る君の清達未だ今日
斯のや二裏の黄金と袖より出づ有るハ切日急き関東
一筋まきは多岐の惜げもどくくを諫るは一向夢中乃心地
——何とも不審このる貧家の内何してつきての黄金と
需むる事と向はるはゆゆの永くは是の後日野史に都より
てはゆ家の徳と述は後き結をん若いさげてまんやと
かも早くわらうとて夜ハ首達と扱ひ一壺の魯潤をも汲うけら

其二

得太師ハ餘の嬉したん終夜眠ようは。熱く思ひあつた
去りし貧妻の人はいよしてゆるる金つりや。是れ未だく。是と更
ちもさる思ひもつる運ども。人の志と度んもつる。夫ハ少も早
閑東よりこの若乃鴻恩も。父母ハ前(其上)も我身の勲氣
ゆがハ再京師ハ持登りて。まよゆて後ハる。潤も身と致
一と不極と極め。曉ゆくまわらも。主夫の日に此恩も云
増るや莫大の黄金と投や。一仁慈の程満口は霜と會る
四地して。袖の返る。方ハ一志と見ける。前て旅中の要
心。半ハ是は流し。半ハ腰を巻て。右ハゆり道をも。父

新朝画也



母の心は不審一多を錦よりのぬれぬ日比の思と仰し。母は彼
繩の廉との顧らる。進々として別れぬ。却て其故を誠
大津乃譚にわが。路費ありて。其の交貨店より。其
彼金と一付けて方孔より。と。交貨店に別れ其判金と
見て見いぐる。所より。若怪おの取替えと。又一付と出
けし。是と取見て又暫思惟し。けし。内より。何ぞん告ると
く。忽ち口人の方者おまり。盜賊遁すと。進取巻ぬ。不
廉忽と吐く。も。耳も。入る。わりの縛して京師の廳
官へ引行ぬ。却て京兆の前より。出出。彼交貨店の者。其
月某夜我店へ盜賊入て判金百斤。失失。事。既新む。

妙く。口人の懐中より。出ぬ。二斤。此金我店の極印者。後失
乃ある。極印。公廳の札印と。取。言上。得。得。何と公
問。何。事。思。ぬ。事。か。一。言。の。返。も。か。低。致。して。考
る。是。令。被。差。更。の。我。と。救。り。為。盜。賊。と。し。ゆる。金。と。其。是
と。陳。せ。む。答。と。思。人。は。驚。し。一。進。我。は。是。迄。の。命。と。是。を。悟。し。
今。何。と。隠。し。む。某。日。某。夜。某。倉。壁。と。穿。り。て。盜。取。ら。ぬ。
と。其。曾。の。回。類。か。我。は。親。戚。と。す。の。と。是。を。速。に。罪。行。
り。と。款。状。明。白。す。と。強。て。推。問。は。る。獄。中。に。囚。れ。懷。中
乃。金。六。廳。は。移。し。置。ぬ。き。ま。ま。上。六。死。刑。に。移。り。ぬ。事。疑
か。彼。思。人。の。我。を。東。行。と。果。さ。る。事。と。定。て。思。以。

さうくやして悪い。是亦黄泉の慈心。今又斯と告ぐ。刑出
て私を救ひ已と罪を人に事も討殺し。さう。刑死の垢
にうら事大去んよ。同。獄中。居合。うら。罪のく。び
罪を免ひてゆる。因て。彼。刑死。と聞。ぶ。た。うら
の。款。度。決。た。農。家。何。某。一。身。了。諾。と。玉。乃。享。恩。の。得。生。忘
ゆる。彼。と。懲。懃。と。務。る。其。後。大。津。の。交。貨。店。を。脱。捨。し
天。蓋。の。内。に。又。百。斤。布。と。見。出。て。急。き。捕。あ。り。解。め。た。相。取
是。は。他。の。家。を。盗。す。る。金。を。う。ら。と。獄。中。より。引。出。せ。再。礼。回
と。蒙。ども。元。來。盜。ま。ざる。金。を。更。に。け。款。状。は。當。惑。し。只。海。中。の
家。く。も。盜。も。集。め。ぶ。との。そ。差。し。入。京。苑。甚。怪。し。と。先。回

の。百。金。も。盡。く。出。て。交。貨。店。の。人。と。て。見。出。す。彼。が。家。乃
極。印。ハ。七。十。斤。は。五。匹。彼。是。故。向。の。款。状。と。一。つ。後。白。丸
明。く。と。又。獄。中。へ。改。め。ぬ。か。る。物。を。誠。の。盜。賊。と。の
死刑。を。行。つ。て。あ。り。と。の。儲。蓄。と。肯。し。考。問。て。今。社。と。度。決
て。何。某。の。家。を。奪。り。て。細。く。詰。り。た。主。天。の。作。天。し。色
金。ハ。我。一。身。亦。て。知。り。さ。る。槐。家。は。は。官。を。奪。る。ら。貌。も
見。付。く。と。は。あ。ま。り。と。強。は。ゆ。暇。と。も。て。東。海。系
乃。船。家。へ。賣。渡。し。價。金。と。して。ゆる。二。百。斤。と。い。う。と。盗
賊。の。疑。ハ。後。引。か。る。吾。が。貧。窮。の。内。に。大。金。を。得。る。と。怪。し。思
し。し。ら。理。な。く。大。き。なる。謝。詰。し。志。し。是。り。は。詰。り。て。蓋。す

と。徳治の情と謝し。却て一通の証書と持て。藤前。斯く若
ぬ京兆固彼金敷の合さふと云はる。仰り。却状の漲き却て
疑ふまに。昨。未。や。罪と交。せ。び。修。み。穿。と。促。さ。れ。る。男。て
其のまじく。こ。し。り。と。ハ。と。呼。ぶ。尋。問。有。り。何。の。邊。而。あ。ん。か。や。
其。金。ハ。大。津。の。交。貨。店。に。息。買。父。の。函。鎖。と。穿。て。花。街。の。騷。ま
多。し。捨。て。と。盜。賊。入。り。より。て。か。し。く。事。と。揭。然。と。露。
顯。し。及。び。ぬ。元。是。彼。農。夫。が。一。陣。の。信。義。を。得。太。命。ノ。元。罪。と
改。る。と。且。恩。人。の。為。命。と。抛。し。大。公。廳。と。感。ぜ。ら。れ。り。部
の。父。母。も。始。末。の。意。報。を。達。せ。れ。得。太。命。斯。志。と。改。る。上。ハ。不
孝。の。罪。と。ま。り。て。家。業。を。継。ぐ。農。夫。の。恩。の。厚。き。め。で。葉。娘

と。鳩。鳥。り。價。身。して。得。太。命。は。嫁。せ。り。め。よ。然。る。上。六。農。夫。之
婦。も。別。に。謝。恩。と。待。よ。及。び。り。の。價。身。の。料。ハ。則。ち。二。百。金
と。し。て。つ。た。へ。り。交。貨。店。の。男。ハ。已。に。盜。と。人。と。確。し。既。に。過
て。罪。多。き。と。罪。す。り。に。到。ら。し。む。る。其。賊。を。重。バ。死。刑。に。行。ふ
と。頭。に。微。細。小。命。と。い。ひ。し。得。太。命。遮。て。死。し。奉。り。ハ
交。貨。店。の。男。若。草。の。一。應。親。打。室。と。持。し。事。ハ。子。も。け。り。罪
に。て。彼。者。ハ。双。親。未。愛。と。物。す。然。る。と。死。刑。に。行。は。ん。事。甚
々。々。と。思。ゆ。尺。且。今。公。命。と。い。ひ。子。の。家。と。免。れ。給。は。し。め。り。我
父母。は。對。し。て。些。子。此。功。の。一。頭。ハ。彼。二。百。斤。の。米。と。い。ひ。後
り。恩。人。の。志。と。昔。て。父母。の。恩。と。解。く。の。品。と。い。ひ。め。り。め。

交貨店まわらばの妻つまは男おとこが罪つみを金かね百斤ひゃくしんを贖あがなりておひおん彼かれは二黄わう鶴かく
 の金かねとて娼夫ちやうふへ價身あての科かは完まるをわしと啼泣なみして訴うたへて京きやう
 死しも得え太師たうしの理りをさす詞ことばを仁恕にじゆあると称なづへておひおん死しのそと
 命いのちをわしわしが交貨店まわらばの金かねを賣うちて一雅みやび豪富ごうふの愁なみとて
 にまじりて子こに刑かぎを免まれと乞こひ得え太師たうしに窺うかがへて婦つま
 と申まをして齋里さいりのゆめかきと後のちの心こころと正ただしくして家事かじを備そな
 へ父母ちちうまの滯とどまりと安樂あんらくを在ある彼かれ農夫のうふも寒ふ暖ぬ暑あつ冷ひやと
 訪たづねて睦むつと世よとわたりて愛あいをなれ



梅園雜話卷之五終大尾

ぞうびやうし身みはあつねと執とけは
 十じゆふひの涙なみもあつねと執とけは
 ねむる夜よ乃な中心ちゆうしんかつこは陰かげとあつね
 心こころ比ひるる衆しゆをわね杞人きじんの語ことばも耳みみに刺さ
 りて道みちはきき乃な物もの終しまむ好このくにはあつねと執とけは
 りつゝあつねと執とけはあつねと執とけはあつねと執とけは
 志こころかきあつねと執とけはあつねと執とけはあつねと執とけは

のり、修養も言の葉も少くも
 るまの林の何く、常のまひさく
 わまにまうく、送る疑りまひ
 ともまひまひまひまひ
 多ふの



文政七甲申年正月

文政七^甲申年正月

江戸書林

大坂書林

馬喰町貳丁目

岩林清兵衛

日本橋砥石店

大坂屋茂吉

心齋橋通博労町

伊丹屋善兵衛

